

研究ノート

海外学術調査「イスラーム世界における宗教復興主義に 関する比較宗教学的的研究」第1回調査報告書

塩尻和子*

The First Report : Overseas investigation,
“Comparative Study on Religious Revivalism in the Present Islamic World.”

SHIOJIRI Kazuko

This is the first report of the Overseas Investigation, “Comparative Study on Religious Revivalism in the Present Islamic World”. This Summer I made a field survey in Ethiopia where I could visit several domestic churches. The Ethiopian Orthodox Church is one of the Eastern Churches that accepted the Monophysitism brought by St. Frementius in 330 A.D. The Christian people there believed themselves as the descendents of King Solomon and Queen Sheba. The Church had been administering its specific sacraments according to the Old Testaments and the teachings of the local saints during the long history of 3000 years.

I studied in this paper the present states of the Ethiopian Church and made a brief report on the main Churches I visited in Addis Ababa, that showed me the vitality of the religion and the vigour of the piety even though people are still in large socio-political difficulties.

As an appendix to this paper there attach three short reports made by the Graduate Students in the Middle Eastern Study Course. Sawada Keiko on Jerusalem. Hanasaka Tetsu on the Upper Egypt. Hyogo Tsuyoshi on Saudi Arabia. They also show the contemporary states of complexity seen in the religious struggle in the Middle East.

* 筑波大学哲学・思想学系助教授

1 エチオピア教会調査報告

「イスラーム世界における宗教復興主義に関する比較宗教学的的研究」(研究代表者:塩尻和子)は「イスラーム」だけを研究対象とするものではなく、宗教復興主義研究を中心課題におきながら、イスラームと周辺諸宗教とのかわりについての調査研究をおこなうプロジェクトである。

1. ソロモンの末裔たち…エチオピア概観

平成12年度の科学研究助成金の援助をうけて、私をはじめでエチオピアの首都アジスアベバを訪れたのは2000年8月1日から5日までの5日間であるが、教会調査は2日間しかおこなうことができなかった。季節は雨季の終わりにあたり、一日に何回も天候が急変して驟雨が襲うという寒い気候であった。「プレスター・ジョンの国」として中世ヨーロッパ人の夢と憧憬をかきたてた不思議の王国の現実、あまりにも悲惨な貧困と政治的不安が蔓延する途上国の姿である。しかし、落ち着いてみると、豊かで美しい自然と長い歴史がかもし出す伝統の重みがあったところにみられる。アジスアベバ市の平均標高は2400メートルであるが、標高の高さはあまり感じられない。郊外のエントット山は3000メートルといわれるので峻厳な山岳地域を想像していたが、実際にはユーカリの林となだらかな農村風景が広がる丘陵地帯でもある。アフリカ大陸のなかでもエチオピアは元来自然環境に恵まれた国のはずである。エリトリアとの国境紛争や内政問題などの政治的要因さえ解決すれば、コーヒーの原産国らしく、薫り豊かな国に戻ることができると思われる。

アフリカ大陸北東部に位置する国土は、面積では日本の3倍強の広さがあるが、高原地帯が国土の3分の2を占めている。周辺地域は赤褐色一面の砂漠であるが、それとは対照的に大地溝帯によって二分された広大な高原には無数の峡谷が走り、緑豊かな森林や田畑が広がっている。高原地域の平均標高は2300メートルであり、最高点は4623メートルに達する。北緯10°C前後に位置するエチオピアでは高原地帯が最も居住に適した土地であり、温暖な気候と豊かな自然に恵まれて古来歴史の中心ともなってきた。また深い峡谷は天然の要塞となって外敵の侵入を防ぎ、3000年をこえる独立と孤立を支えてきた。現在の首都アジスアベバもエチオピア高原のほぼ中央部に位置している。

旧約聖書「列王記I」(10:1-13)にはシバの女王がソロモン王を訪ねてエルサレムへ赴いたと記されているが、シバ(シェバ)がエチオピアの一国であるという記述はどこにもない。この伝説的な物語に従うなら、エチオピアの建国史はソロモン王とシバの女王との間に生まれたメネリク1世が最初の王国を創設した紀元前10世紀に始まると考えられる。しかし、史実としてさかのぼることができる建国前史はもっとも早いもので紀元前3世紀ころからしかみられない。その頃、南アラビアに居住していたユダヤ系民族が北部のアクスム周辺に移住し、原住

民のクシュ語系民族と混血し始めたことが知られている。歴史的資料や碑文の解読などによってその存在が確認される最初の王国は1世紀になって成立したとみられるアクスム王国である。この王国は10世紀まで続いたが、4世紀にはエザナ王（在位325-350）のもとで最盛期を迎えた。エザナ王はメロエ王国を接収するなど近隣諸国を征服して版図を拡大していたが、王がキリスト教に改宗したことによってエチオピアにキリスト教が導入されることになった。エザナ王がキリスト教徒になるきっかけとなったのは、王がまだ若い時期に財務官兼秘書として働いていたローマ人のフルメンティウスの伝道によるものである。フルメンティウスは王が成人すると、一時期アレクサンドリアへ赴いてアタナシウスを訪れ、アクスムのキリスト教化の援助を要請したと伝えられる。これによって、エチオピアのキリスト教会はエジプトのコプト教会の支配下に入ることになり、その関係はじつに1959年まで続いた。

エチオピアはその後、大小の王国が連立するなかでイスラーム勢力の侵攻（10-12世紀）、カトリック教会との合同問題をへて、近代においてもヨーロッパ列強による植民地政策に取りこまれることなく、1896年の第1次対イタリア戦争にも打ち勝った。1936-41年のファシズム・イタリアの侵略（第2次対イタリア戦争）による併合期間を除けば、約3000年にわたる独立を保ったアフリカ唯一の国となったのである。最後の皇帝となったハイレ・セラシエ（在位1930-74）はソロモンの血統を主張して強い指導力を発揮したが、社会主義を掲げるクーデターによって廃位され、翌1975年に病死した。しかし彼は現在でも大衆からは熱狂的な尊敬を集めており、エチオピアの教会や教会付属博物館には皇帝ゆかりの品々が手厚く保存・陳列されている。そのさまはあたかも「聖者」として扱われているかのようであった。

2. エチオピア教会の概要

現在のエチオピアでは、キリスト教徒人口は国民の45%といわれる。35%がスナ派のイスラーム教徒、残りの11%のうちにはさまざまな聖霊崇拜などがあるが、ファラシャと呼ばれるユダヤ人も含まれている。

エチオピア教会のもっとも特徴的な要素は聖櫃の存在である。ソロモン王とシバの女王との間に生まれたとされるメネリク1世は父ソロモン王から「契約の聖櫃」(Ark of the Covenant)を授かり、エチオピアへ持ち帰ったと伝えられている。聖櫃は浅い木製の箱で、そのなかにはモーセがシナイ山で神から与えられた十戒が記された大理石の石版が収められているといわれる。聖櫃は長い間、タナ湖の小島にある修道院に安置されていたが、1964年、ソロモンの伝承にしたがって、ハイレ・セラシエが古都アクスムのSt. Mary of Zionに聖櫃を安置するための新聖堂を建設してここに移した。アクスムがシバの女王の生まれ故郷であったとされているからである。開堂式は1965年におこなわれたが、イギリスのエリザベス2世も参加している。モーセからソロモンをへてエチオピアに与えられた聖櫃は、番人として選ばれた修道士だけが見ることができるとされるが、彼は生涯聖堂の敷地から外へ出ることができない。つまり生きている者は決して見ることはできないといわれている。それぞれの教会の至聖所にも聖櫃のレプリ

カが安置されているが、これらは本物の聖櫃から神秘的な力を分け与えられていると信じられている。

エチオピア教会の正式名称は「エチオピア単性論派正教会」(The Ethiopian Orthodox Tewahedo Church)で、カルケドン公会議(西暦451年)において異端とされたキリスト単性論を受容した東方教会のひとつである。「正教会」(Orthodox)を名乗ってはいるが、「東方正教会」の一員ではないことに注意をする必要がある。エチオピア教会のほかに東方キリスト教会のなかで単性論に立つ教会には、シリアのヤコブ派教会、アルメニア共和国を中心に展開するアルメニア教会、エジプトのコプト教会(正式名称は「エジプト正教会」)などがあり、それぞれ土着色のつよい独自の典礼をもつ。エチオピア教会は1997年の時点で国内に32管区を擁し、海外ではエルサレム、カリブ海諸島、ラテン・アメリカ、アメリカ合衆国、ヨーロッパ、自国以外のアフリカ、カナダなどに教会をおいている。大主教40名、聖職者40万人、3万の地域教会を有する。現在の総主教は1959年にエジプトのコプト教会から分離独立して以来5代目にあたるアブーネ・パウロス(Abune Paulos)である。

今夏、アジスアベバの教会関係書店で入手した *The Church of Ethiopia. Past and Present.* (Abune Paulos et al., Addis Ababa, 1977) と *The Ethiopian Orthodox Tewahedo Church, Faith, Order of Worship and Ecumenical Relations* (Abune Mekarios et al., Addis Ababa, 1996) を参照しながら、エチオピア教会の儀式について簡単に触れたい。

①機密(秘蹟)

教会は洗礼機密(Baptism)、傅膏機密(Confirmation)、聖体機密(Holy Communion) 神品機密(Ordination)、婚配機密(Matrimony)、痛悔機密(Penance)、聖傅機密(Uction of the Sick)の7機密(秘蹟)をもつが、この由来は旧約聖書、箴言9:1にもとめられる。

これら7秘蹟のうち、神品機密は叙階儀式であり、主教(bishop)以上でなければ司式することができない。ほかの6秘蹟は主教でも司祭(priest)でも執りおこなうことができる。聖体機密(聖体拝領)はもっとも神聖な儀式とされるが、これを受ける信者は前夜から少なくとも15時間の断食をおこない、教会にて痛悔機密(罪の告解)を受けておかなければならない。秘蹟は原則として教会で受けるものであるが、重病などの事情によっては聖職者が家庭を訪問することができる。とされる。

②聖職者階層

聖職者はすべて男性で、輔祭(deacon)、司祭(priest)、主教(bishop)、大主教(archbishop)の区別があり、教皇位として総主教(patriarch)をおく。輔祭は家庭をもつことができ、司祭にまでは昇進することができる。しかし、修道士として、司祭に叙品されることを望む場合には独身でなければならない。司祭職には既婚者でも就くことができるが、至聖所、聖油、聖櫃、新たに建設された教会や聖水器などを聖別する権限は与えられていない。司教から主教に昇進することができるのは独身者にかぎられる。主教以上は教会でおこなわれるあらゆる

る秘蹟や行事を取りしきることができる。

③礼拝

礼拝は個人礼拝、家族礼拝、公共礼拝の3種類にわかれるが、1日7回おこなうように決められている。7回とは朝、3時課、正午、9時課、日没、就寝時、深夜であるが、朝と日没時は聖職者も平信徒も教会に出席しなければならない。その他の礼拝時はどこで祈っても構わない。礼拝の手順は個人礼拝であれ教会での礼拝であれ、決められたとおりにおこなわれる。まず、肩から腰を被う丈の衣服をまとめて、まっすぐに立つ。左右や前後に体を揺らすことなく、しっかりと東を向いて立つ。礼拝の最初と最後に十字をきる。3本の指を丸めて合わせ、額から下へ向けて下ろし、次に左から右へと移動させる。十字をきる時は必ずキリストの受難を覚えながら、「父と御子と聖霊の御名において、ひとつの神よ、私はわが顔と全身で十字の徴に十字をきります…」という祈りを捧げる。自分の祈りを捧げる者は他人に聞かれないように小さい声で祈らなければならない。礼拝中には自分の破戒と罪を後悔する深い感情をもって咽び泣かねばならない。原則として礼拝中は人に話しかけるなどして中断してはならない。やむをえない場合には中断したところから再開しなければならない。

③入堂儀礼

教会に入る際には平伏、跪拝、低頭（お辞儀）などの作法をおこなわなければならない。平伏は地面に額をつけるかたちで完全な服従の姿勢であり、教会に入る時、礼拝を始める時、礼拝中も平伏を必要とする言葉が発せられた時、礼拝の終了時におこなわなければならない。しかし、日曜日、聖霊降臨祭、キリストや聖マリアの祝日などの主要な祝祭日、また聖体機密を受けた後などには平伏は禁止され、跪拝と低頭がおこなわれる。

④祝祭日

エチオピア教会では土曜日と日曜日とを聖日とする。土曜日を聖日とするのは旧約聖書に基づくとされるが、キリスト教を受容する以前のユダヤ教の影響が今日まで残っていると考えられる。しかし、今日では土曜日は日曜日ほど重要視されていない。

エチオピア教会には多くの祝祭日があるが、おもなものは「み告げ祭」(Annunciation)、「聖誕祭」(Christmas)、「公現祭」(Epiphany)、「変容祭」(Transfiguration)、「棕櫚の日曜日」(Palm Sunday)、「十字架刑の日」(Crucifixion)、「復活祭」(Easter)、「昇天祭」(Ascension)、「聖霊降臨祭」(Pentecost)などがある。なかでもエチオピア教会の特色をもっともよく表わす祝祭はアムハラ語で Timket と呼ばれる公現祭で1月19日におこなわれる。イエスが洗礼者ヨハネからヨルダン川で洗礼を受け、水から上がった時に天が開けて父なる神の声が出たという新約聖書の記述（マタイ3：1-17、マルコ1：4-12など）に基づくもので、イエスのキリストとしての召命を祝うものである。公現祭の前日には「契約の聖櫃」が教会から持ち出されて川岸に置かれ、夜を徹して賛美歌が歌われる。翌朝には川岸で祈禱が捧げられ、聖書が詠まれる。清められた川の水がイエスの洗礼を祝い、その霊的祝福に預かるために集まった群衆に振りかけられる。そのほかに聖母マリアをはじめとするおもだった13人

の聖者にまつわる祝日が月命日のように毎月決まった日に盛大におこなわれる。

3. アジスアベバ市内の教会

教会を訪問する際には、肌を露出しない服装をすること、教会の近辺では喫煙しないこと、また教会の内部へは靴を脱いで入ること、至聖所へは近づかないこと、などの注意が必要である。またミサに参加する場合には、朝食を採らないで出席しなければならない。信者でなくとも教会の門に入る際には十字をきり、お辞儀をするほうがよい。信者は会堂の入り口で平伏して十字をきり、床や壁にくちづけをするが、信者でない見学者は平伏することまでは要求されない。靴や履物を脱ぎ、至聖所に向かって深いお辞儀をしてから中央へ進む。辞去の際にも至聖所へ向かってお辞儀をしてから退出する。

今回は在エチオピア日本国大使館の現地職員であるタイエ氏に案内役をしていただき、2日間の調査に同行してもらった。彼は熱心な信者なので、意図的に神聖なミサの時間帯を避けて案内してくれた。そのために礼拝風景を直接見ることはできなかったが、各教会の内部を静かにゆっくりと見学することができた。移動中に、ミサが終わったばかりの会堂から、一体なにごとかと驚くほどの大群衆が吐き出されてくるのを見かけて、やはりはじめての調査としてはタイエ氏の忠告に従ったほうがよいと考えたのである。

今回訪問することができた9箇所の教会のうち、おもなものを紹介する。

① Trinity Church

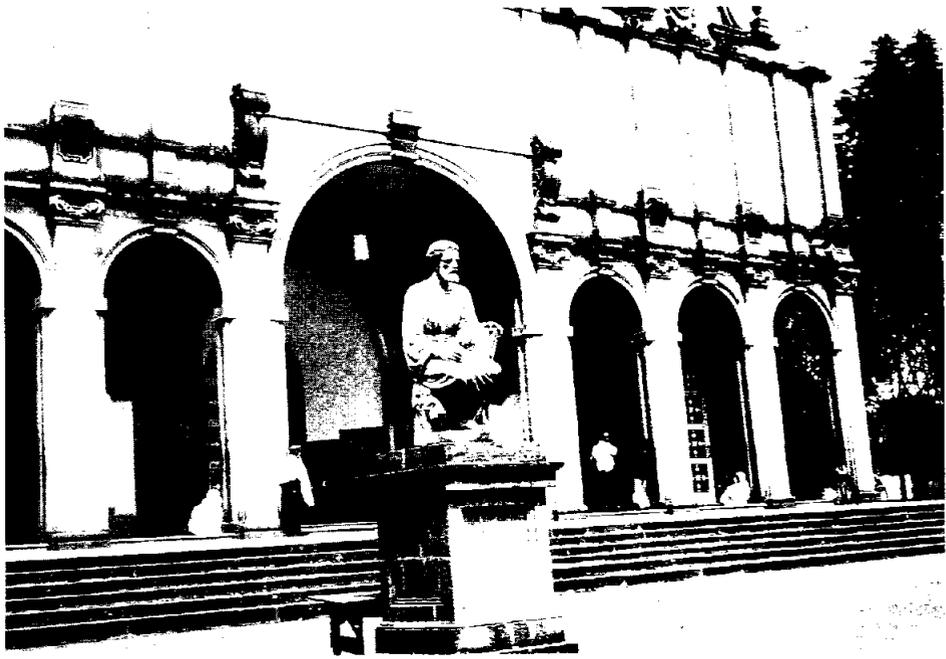
1932年にハイレ・セラシエによって建設された教会で国内でも最大級の規模を誇る教会である。アジスアベバにある教会はほとんどが八角形をしているが、これは長方形でヨーロッパに多く見られるバシリカ式の会堂である。外壁は灰色の石作りで前庭には4人の福音書記者の像が置かれている。内陣には最後の皇帝ハイレ・セラシエの皇后メーネンの廟がある。贅をつくした棺が2つ並んでいるが、皇帝の遺体はここには安置されていない。内部には一面にハイレ・セラシエの後半生を描いた巨大な絵画と、天使や聖者を描いた天井画やステンドグラスが見られる(写真1)。

② Church of St. Raguel

アジスアベバ市内を見下ろす標高3000メートルのエントット山の頂上の左よりにひっそりと佇む古い円形教会で、皇帝メネリク2世(在位1889-1913)がインド人の大工に建てさせたものである。どこか東洋的な典雅な雰囲気があるのはそのためかもしれない(写真2)。私が訪問した時は修復工事がおこなわれていて、堂内のイコン類は近くの穴倉に保管されていた(写真3)。大天使ラグエル(St. Raguel)は教会や修道院を怪物から護る天使である。

③ Kidane Mehiret (聖泉)

エントット山の東斜面にある泉で1911年にメネリク2世の皇后タイトウ(Tayitu)によって建設された湯治場で、万病に効くといわれ、国内外から多くの人々が訪れる。休憩所、礼拝



写真一



写真二



写真3



写真4

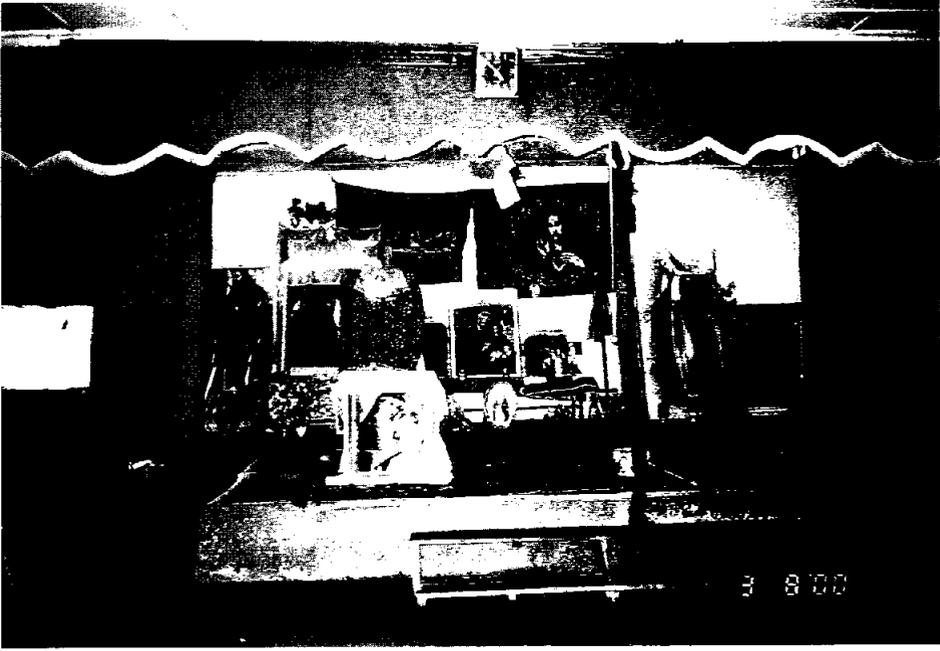


写真5



写真6



亭高



屋真



写真一



写真二

所などの設備も整っている（写真4；中央の建物の中にシャワー室がある。写真5；休憩所であるが、聖母マリアのイコンが並べられている）。聖泉の水源とみられる場所に Church of Kidane Mehiret があり、会堂の周辺で修道士や輔祭たちが朝の勤行をおこなっていた（写真6）。

④ Church of St. Maryam

エントット山の頂上から右よりにあり、八角形で色とりどりの装飾を施されていた（写真7）。残念ながら中をみることはできなかったが、付属の博物館にはメネリク2世とその娘ザウディトゥ（Zawditu, 女帝, 在位1916-1930）が用いた王室の儀礼用衣装、外国からの贈り物、教会ミサ用品などが陳列されている。教会のそばにはメネリク2世が新首都アジスアベバを建設するまで用いていた旧王宮の遺構が残っている（写真8）。ミサの時間が終わった教会の庭では、通りがかりの司祭や修道士から信者が祝福を受けていた（写真9）。

⑤ Saint George's Cathedral

アジスアベバ市内の代表的な教会で八角形をしている。外部は落ち着いた色合いの装飾であるが、教会内部には極彩色のイコンや現代画家の手になる絵画や天井画、モザイクなどが見られる。聖ジョージとはゲオルギウスとも呼ばれる聖人で、中東、アフリカなどで熱心に崇敬されているが、13世紀にはイギリスの守護聖人ともなっている。シバの女王がソロモンを訪ねた模様を描いた絵画のそばにハイレ・セラシエ1世の戴冠式の絵が掲げられていた。ハイレ・セラシエは1930年にこの教会で王位に就いたためでもある。教会のそばにある小さな博物館にはハイレ・セラシエの戴冠式の装束や王冠、総主教のガウンや行列用十字架などが陳列されていた。博物館のガイドが教会のなかで太鼓を打ってミサのダンスをする模様を再現してくれた（写真10）。

エチオピア教会がエジプトのコプト教会の支配を脱して独自色を強めはじめたのは、わずか40年前のことである。その後、1974年には社会主義革命が起こってハイレ・セラシエ皇帝は廃位させられ、混迷を極めた権力闘争が91年まで続き、国土も人心も疲弊した。社会主義政権は教会を抑圧し総主教や主教たちを投獄したが、現在の総主教アブーネ・パウロスも7年間獄中にあった。しかし、この社会主義政権下の17年間にも教会は存続し、人々の信仰の火は消えることはなかった。

教会訪問の最後にタイエ氏が自分の所属する教会へと案内してくれた。夕刻が迫っていて周辺には人の姿もほとんどない。質素な八角形の建物に極彩色の装飾がつけられているさまは写真で見たことのあるチベットの寺院に似ているように思えた。門を出たところで輔祭の姿を見つけてタイエ氏は駆け寄り、深深とお辞儀をして輔祭の手と輔祭が手に持った十字架に交互にくちづけをくりかえした。立ち止まって彼を待ちながら、私には、このような光景こそがエチオピア教会のあり方を物語ってくれるように感じられたのである。

II 中東地域調査報告

以下の報告は今夏、地域研究科中近東コースに在籍する大学院生3名による調査報告書を筆者の責任において要約したものである。

1. エルサレム訪問記（報告者：沢田佳子）

エルサレムは世界中からさまざまな人々が集まる町である。そこでは人々のアイデンティティはその出身国に帰せられるという印象を受けた。報告者には、いわゆるエルサレム問題も、世界中から移民が集結する多民族国家の問題としての一面もあるのではないかと思われた。たとえば各自の出身国に応じてそれぞれの国名を冠した教会があり、居住区域があるが、ある宗教の人々が住んでいる区域に異なった宗教の聖域があるという事実があげられる。居住空間と宗教的空間が必ずしも一致していないということが問題となる。

アラブ人のタクシーに乗って、イスラエルのシンボリックな場所、たとえば博物館や名所を訪れようとする、狭い地域の中なのに運転手はその場所も道順も知らないという事態に何度も出くわした。アラブ人は彼らの生活圏でのみ行動しており、ユダヤ人もアラブ人の生活空間に入って行かない、つまり彼らは地理的には狭い地域に住んでいても、それぞれの縄張りの内側でのみ暮らしているのである。アラブ人とユダヤ人は共存しているのではなく、「並存」しているにすぎないように思えた。だから互いに狂信的だとか、高慢で横柄だ、あるいは危険だという印象を抱いて、日常的な対話や相互理解をしようとはしない。

パレスチナ自治区では、ベツレヘム、ナザレ、エリコ、ヘブロンを訪れたが、それぞれの町の入り口には検問所があり、タクシーの運転者が行き先や目的をたずねられたり、通交証の提示を求められたりした。ヘブロンにはイスラエル政府が管理する近代的な入植地があって、入り口にはゲートがあり、検問所も見えた。高いフェンスの向こう側にはいつのまにか新しいシナゴグが建設されていたりするので、ヘブロン住民の怒りを買っていると聞いた。ヘブロンは現在起こっているパレスチナ住民の抗争事件でも現場になっているが、現地を実際に見てみると、報告者には彼らの怒りはもっともな気がした。

2. 中エジプトの農村（報告者：花坂 哲）

2000年7月23日から9月2日までエジプト中部エル・メニア県テヘネ村での遺跡発掘調査に参加し、村民と生活をともにした。彼らとの交流の中から感じたことを報告する。

中部エジプトにはムスリムだけでなくコプト教徒も多く住んでいるが、テヘネ村にもコプト教徒が3割ほどいると聞いた。村内にはモスクが3、教会が1つある。発掘現場の古代都市アコリスの中央道路が神殿跡から教会まで延びており、古代の石柱と思われるものが教会の敷地の下層から見ついていることを考えると、コプト教会は古代都市の聖域となんらかの関係を

もっているのかもしれない。

ムスリムとコプト教徒との関係については、村民はだれでも「非常によい関係である」と言う。発掘作業員40名のうちコプト教徒は17人であるが、作業中も休憩時間も宗教によってそれぞれ固まっているということなどなく、ほとんど見分けがつかなかった。居住区域も宗教によって分けられているということもなかった。しかし、結婚式などでは同じ宗教の信者同士で参加しており、村の娯楽であるサッカーなども宗教によってチームが完全に分かれていた。表面的には何事もなくよい共存関係を保っていても、両者を隔てる壁があるようにも感じた。

エジプト南中部の農村地域はイスラーム復興主義思想の温床だといわれることが多い。1997年のルクソール事件の後ではテヘネ村でも6人の活動家が逮捕されたといわれる。周囲の人々は彼らが逮捕されるまで原理主義運動の活動家であるとはまったく知らなかったようである。残された家族はそのまま村にとどまっているが、公的な仕事に就くことができず、肩身の狭い思いをしているようである。コプト教徒はイスラーム原理主義について比較的気軽に話してくれるが、ムスリムは「彼らは特殊な例だ」とか「ムスリム全員がそんなことを考えているわけではない」と強調していたのが印象的であった。しかしこの事件の後、発掘現場や日本隊の宿舎などに警察の警備が24時間つくようになった。2年前には宿舎から外へ出ることができず、村人を訪ねることも家に遊びに行くこともできなかったが、今年は護衛つきではあってもあちこちへ行くことができた。

テヘネ村ではほとんどの住民は農業に従事しているが、農地を持たない者や若者は石灰岩の採掘現場で働くことが多い。石切り作業は過酷な労働環境であるが、他の職種よりも賃金が高い。ここ数年は家庭に電化製品が普及してきており、冷蔵庫、テレビ、扇風機などを持っている家も多くなった。しかし自家用車をみかけることはなかった。村民のなかには電気を引くことができない者もあり、いわゆる「洋服」を着ている者も皆無に等しい。女性の仕事は家事がほとんどで、戸外の仕事は肥料用の牛糞を運ぶことくらいである。しかし、発掘隊が20年もここで作業をしているせいか、ムスリムの女性たちも報告者に対して顔を隠すことなく、自然な対応をしてくれていた。

3. サウジアラビア訪問記（報告者：兵庫 剛）

この夏「第2回日本・サウジ青年交流使節団」の団員に選ばれて10日間、サウジアラビアの Riyadh と Jeddah を訪問した。サウジアラビアは厳格なワッハーブ派のイスラームを遵守する国であるが、報告者がみるかぎり、かなり現実的な対応がみられた。たとえば1日5回の礼拝時刻には街中にアザーンが響き、ショッピングセンターも商店も礼拝時刻が近づくといっせいに閉まってしまう。ところがサウジ人全体が熱心に礼拝をしているというふうには思えなかった。使節団のエスコート役も礼拝の時間をあまり気にしていないようにみえた。服装は男性はほとんどが白にワンピース状の長衣で頭には赤白、あるいは白一色の布を被っており、女性は頭から全身が覆われていて、手袋をして指先まで隠している。厳格なワッハーブ派の信奉者は

普通よりも丈の短い、足のくるぶしが見えるくらいの長さの衣を着て、頭には布をとめる輪を被っておらず、顎鬚を伸ばしているなどの特徴があった。外国人の女性も顔は隠さないまでも頭から長いベールを被っていた。

石油収入に支えられた豊かな生活水準は現在でも保たれているので、街にはベンツやアメリカ車などが走り、スーパーマーケットでは欧米の物資が豊富である。しかし禁酒や食物規制は厳しく守られているし、禁煙も進んでいるらしく、タバコを吸っている人を見ることがなかった。しかし、フィリピン人のタクシードライバーの話によると、金さえ払えば酒・女性・麻薬などなんでも手に入るということである。欧米系の雑誌は検閲を受けており、女性のグラビア部分は黒く塗られたり、破かれたりしていた。しかし一方では衛星放送用のアンテナは自由に設置することができ、エジプトやレバノンから放映される画像から女性の水着姿も見ることができる。これは一説には、厳格な規制を求める保守派の主張と、国家による情報管理に対する国民の不満とをうまく妥協させた結果であろうといわれる。インターネットはプロバイダーによって一部検閲を受けているが、市内にはインターネット・カフェもあり、パソコンの購入も自由にできる。さまざまな側面で建前と本音が透けてみえるような現象が散見されたことが印象的であった。